

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

平成23年10月11日

財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所 属 部 局 生存圏研究所

職 名 教 授

氏 名 川 井 秀 一

助成の種類	平成23年度 ・ 国際会議開催助成			
事業内容	木の文化と科学 京都 2011 (Wood Culture and Science Kyoto 2011)			
開催期間	平成 23年 8月 6日 ~ 平成 23年 8月 9日			
開催場所	京都大学宇治地区 おうばくプラザ			
参加者	総数	内訳		
	102名	国内73名 海外29名		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(プロシーディングスなどをすでに郵送済み)			
会計報告	事業に要した経費総額	(飲食・宴会経費を除いた額)	5,792,140 円	
	うち当財団からの助成額		1,500,000 円	
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) 公益財団法人 文化財保護・芸術研究助成財団 科学研究費補助金 基盤研究(A)、平成22年度京都大学生存圏研究所研究集会		
	経費の内訳と助成金の使途について			
		費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
		講演謝金及び旅費補助・スカラシップ	1,330,000	970,000
		看板・ホームページ作成費用	92,525	73,975
		シンポジウム同時通訳費	421,025	421,025
		プロシーディングス等送料	35,000	35,000
		イベント会社への業務委託	1,054,153	0
	プロシーディングス+ポスター印刷費	754,955	0	
	会場費・人件費(バイトを含む)	1,057,900	0	
	テクニカルツアー(飲食費を除く)	414,200	0	
	その他(キャンセル費用など)	632,382	0	
	合 計	5,792,140	1,500,000	

国際シンポジウム

「木の文化と科学 京都 2011 (Wood Culture and Science Kyoto 2011)」

代表者：川井秀一

概要報告書

平成 23 年 8 月 6 日 (土) ～9 日 (火) の 4 日間、京都大学宇治キャンパス「おうばくプラザ」において、国際シンポジウム「木の文化と科学 京都 2011 (Wood Culture and Science Kyoto 2011)」を開催した。本シンポジウムは、当初 2011 年 3 月に京都大学農学部で開催された第 61 回日本木材学会大会のポストシンポジウムとして行われる予定であったが、東日本大震災の発生を受けて、日程を変更して開催されたものである。本シンポジウムの目的は、歴史的建造物や木製文化財に代表される「木の文化と科学」に関する現在の国内外の研究コミュニティのネットワークを基盤に、より国際的な連携・協働を深める先導的役割を担い、更なる発展の方向性を探ることにある。結果として、震災前の登録者よりは若干減少したものの、13 ヶ国、102 名の参加者を得ることができた。本助成によって、多くの外国人若手研究者や日本の学生にスカラシップによる旅費・参加費のサポートを実施することができたことは、本シンポジウムの成功に重要な役割を果たしたと言える。

初日の 6 日には受付とレセプション、7 日には 46 件のポスター発表と一般公開の講演会、8 日にはキーノート 1 件を含む 38 件の口頭発表、そして最終日の 9 日にはテクニカル・ツアー（興福寺中金堂再建現場等の見学など）が行われた。個々の内容について、以下に少し詳しく説明する。

ポスター発表においては、46 件のポスター発表の中から一ポスター賞を制定し、厳正なる審査の元、5 件名の優秀ポスター賞が選ばれた。その発表内容は、木材劣化の評価法や古材の材質評価、新しい木質構造の提案など多岐に渡っており、本シンポジウムにおける学問分野の広がりを見ることができた。また、ポスター会場において昼食やコーヒーブレイクを取れるようにしたおかげで、ポスターのコアタイム終了後も活発な議論が行われていたのが印象的であった。

一般公開の講演会では、イタリア・フローレンス大学 Luca 教授による「イタリア・ルネッサンス期パネル画の維持管理—モナ・リザを例として—」、中国林業科学研究院木材工業研究所姜教授による「馬王堆漢墓および老山漢墓から発掘された木材の樹種」、(株)西澤工務店代表取締役 西澤氏による「木材を扱う大工の知恵」、(財)美術院国宝修理所 所長 藤本氏による「木造彫刻の保存修理—文化財修理所の意義と実践—」、京都大学生存圏研究所 杉山教授による「木の文化を探る生存圏科学—最近の話題から—」と題して、5 件の講演があった。この講演会においては、同時通訳により一般参加の方にも英語の講演を楽しんでもらえるようにしたため、シンポジウム登録者数を大幅に超える約 150 名の参加があった。

口頭発表においては、3 会場で平行してセッションが組まれた。木製文化財の保存環境に対する提案から、最新の調査・診断技術まで、多岐にわたる研究発表が行われ、本シンポジウムの幅の広さを物語っていた。特に印象的であったのが、文化財に対する考え方に国による違いはあまり見られず、それぞれが持っている技術や考え方について、共通の認識に基づいた非常に活発な議論が行われたということである。新たなコミュニティの形成に、間違いなく役立ったと考え

ている。

また、テクニカルツアーにおいては、夏の暑い時期であったこともあり当初予定していたよりも若干少なく 40 名ほどの参加となった。本ツアーには奈良興福寺中金堂の再建現場の見学及び東大寺・春日大社の視察が組み込まれ、普段目にすることが出来ない場所への立ち入りや、専門家による懇切丁寧な説明があった。日本語、英語、そして中国語などを交えて様々な質問が飛び交う様は、まさに国際シンポジウムとしての面目躍如であった。

最後に、バンケットの際に、今回のシンポジウムの開催趣旨にご賛同いただいた方々から、次回、第二回のシンポジウムを是非開催してほしい、との声上がり、2013 年に中国で行うことが承認されたので、報告しておく。上述のように、本シンポジウムに多くの国から多数の参加者を得ることが出来たのは、貴財団の助成によるところが大きい。記して謝意を表す。